



施工
レポート

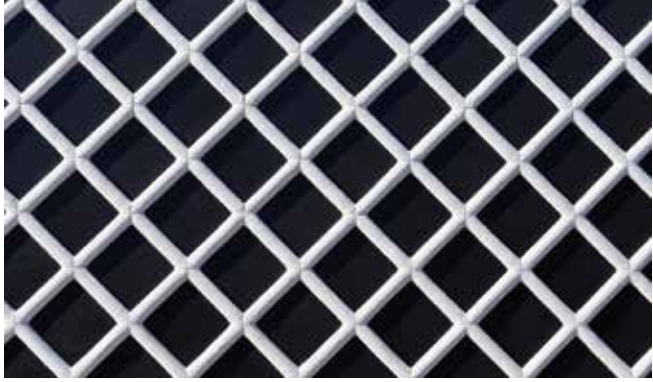
RC造建築物の外壁意匠に伝統の海鼠壁を活かす — 普濟寺宝物殿外壁工事 —

設計監理：(株)寺建築研究所 / 施工：(株)翠雲堂 / 左官施工：(株)あじま左官工芸

はじめに

臨濟宗建長寺派に属し、多摩一円に末寺18ヶ寺を有する同派屈指の名刹である普濟寺は、南北朝時代の文和2年(1353年)に開創された。立川市の名前の由来ともなっている立川宮内少輔宗恒が、鎌倉建長寺より物外可什禪師を招いて居城の一隅に一族の菩提寺として建立したもので、境内には立川氏居城の史跡として土塁が残っている。

普濟寺は立川氏の庇護のもと、多数の僧侶が修行に励む荘厳な道場として隆盛を極めたものの、天正18年(1590年)の豊臣秀吉による小田原攻めの際、後北条氏の幕下であった立川氏は主家北条氏とともに敗れ、その兵火に罹って大半の堂宇・寺宝を焼失してしまう。堂宇の再建は数十年後の万治年間(1660年頃)に始められ、元禄4年(1691年)までに方丈・仏殿・庫裡・鐘楼・塔頭(心源庵・有慶庵)が復興。『江戸名所図会』の挿絵にみられるような一大伽藍を築いた。その後の明治期には、寺内に皇族の別邸が設けられ、皇太子時代の昭和天皇をはじめ、皇室の方々が相次いで来駕し、昭和45年10月の楼門落慶では三笠宮崇仁殿下・同妃殿下が来臨されるなど、立川地区の歴史と文化を伝える名刹として地域の人々に親しまれてきた。



▲寸分の狂いもない海鼠壁の仕上がりは圧巻だ

そんな寺院に再び悲劇が襲ったのは平成7年4月、放火により本堂・庫裡・客殿・書院といった建物のほか、重要文化財に指定されていた開山物外可什禪師坐像、本尊聖観世音菩薩像など数多くの寺宝が焼失してしまった。一方で、普濟寺が所有する国宝・六面石幢は中庭に安置されていたため無事だった。その後、約10年かけて本堂や客殿などを新たに再建してきた。

このほど建てられる宝物殿は、この国宝が安置されていた中庭のコンクリート製覆屋の老朽化に伴い新たに建設されるもので、施主である住職のこだわりで外壁には「なまこ壁」が施工されることとなった。